

福建語におけるいくつかの音声的特徴

中 嶋 幹 起

- 0. はじめに
- 1. 福建語の音節
- 2. 声母
 - 2.1 声母の鼻音化現象
 - 2.2 [l] と [dz, dz̥] について
 - 2.3 /c·c'·r·s/ について
 - 2.4 声門音 [ʔ], [h] について
- 3. 韻母
 - 3.1 介音
 - 3.2 主母音
 - 3.3 韻尾
 - 3.4 声化韻について
 - 3.5 音節末尾子音の連音現象
- 4. おわりに

0. はじめに

この小論は、閩音系方言研究者による現在までの音声・音韻に関する記述的研究の成果を、筆者自身の観察によって再確認し、該方言における特徴的な音声的事実を要点的にまとめたものである。

本稿作成にあたっては、インフォーマントとして蔡素娥嬢（中華民国台湾省台中市出身、女性、1947年生）に協力を頂いた。

音声表記は [] で示し、音韻表記は / / で表わす。声調については、印刷の都合を考慮して数字で表示した。各々の数字は以下の声調を表わしている。

1=陰平 2=陰上 3=陰去 4=陰入
5=陽平 7=陽去 8=陽入

0 は固有の声調（「本調」basic form）を失って軽声化していることを示す。音韻表記の右肩の数字は「本調」を表わす。該当する漢字が不明のときは□で表わした。

1. 福建語の音節

福建語の音節は、IMVF/T と構造的に分析される。I (Initial) は声母（頭子音）、M (Medial) は介音（副母音）、V (Principal vowel) は主母音、F (Final) は韻尾（音節末尾の副母音または子音）、T (Tone) は音

節全体にかぶさる声調である。I（声母）に対し -MVF/T を韻母という。たとえば「間」kiəŋ¹ は、はじめから順に IMVF/T に該当する。音節によっては M, F を欠く場合がある。

次に、声母、介母、主母音、韻尾の順に従って特徴的な点を考察する。

2. 声母

音声的に観察した福建語の声母を、その調音点と調音法とによって分類すると次頁の表のようになる。

2.1 声母の鼻音化現象

[m]・[n]・[ŋ] は鼻音化韻母の前に現われ、[b]・[l]・[g] は非鼻音化韻母の前に現われ、両者は complementary distribution を示している。この現象は [b]・[l]・[g] が後続する鼻音化韻母の鼻音性に同化されて [m]・[n] [ŋ] に交替しているのであると解釈される。したがって、鼻音化を示す音素 /N/ を立てれば、[m]・[n]・[ŋ] はそれぞれ /b-N/・/l-N/・/g-N/ と解釈することができる。

[m̩iã⁵] /bian⁵/ (名) <名前>
[m̩ãĩ⁷] /bain⁷/ (覷) <～してみる>
[m̩õãĩ⁵] /buain⁵/ (糜) <かゆ>
[ŋĩ⁵] /lin⁵/ (年) <年>

調音点 調音法			両唇音	歯音	歯茎音	歯茎硬口蓋音	軟口蓋音	声門音
			閉鎖音	破裂音	無声	p	t	
無気	p'	t'					k'	
有気	b	l					g	
擦音	無声				ts	tʃ		
	無気				ts'	tʃ'		
	有気				dz	dʒ		
摩擦音	無声			s	ʃ		h	
鼻音	有声	m	n			ŋ		

[ŋiã²] /lian²/ (頷) <もらう>

[ŋiũ⁵] /liuN⁵/ (量) <計る>

[ŋgɔ³¹] /gon²/ (五) <序数詞の 5>

[ŋã²] /gan²/ (雅) <上品な>

[ŋĩãũ¹] /giaun¹/ (□) <くすぐったい>

共時的には、このように鼻音化を示す音素 /N/ を立てるのも一つの解釈ではあるが、native speaker の intuition にも合致せず、経済性をのみ考慮したうらみがある。故董同

龢氏は「廈門方言の音韻」のなかで、[m] と [b], [n] と [l], [ŋ] と [g] は complementary distribution を示しているからそれぞれ一つの音素を立てることができるとしながらも、いくつかの理由²⁾によってそれぞれ別に /m/・/b/・/n/・/l/・/ŋ/・/g/ を立てている。

同じ著者による『記臺灣の一種閩南話』では、このような解釈をした理由を、通時論的観点から以下のように説明している³⁾。

- 1) [gɔ⁷] /go⁷/ (五 <基数詞>) と [ŋã²] /ŋa²/ (雅) との頭子音の音は異なるとこのインフォーマントは、はっきり意識している。他方、[ŋgɔ³¹] /ŋo²/ (五 <序数詞>) や [ŋgɔ⁵ k'i⁵] /ŋo⁵ k'i⁵/ (蜈蚣 <血を吸うひる>) のごとく、音声的には [g] と [ŋ] との中間的発音をする語もある。これらは /ŋ/ に該当すると解釈される。なお、別のインフォーマント (台東出身、女性、1944年生) によれば、/g/ と /ŋ/ との対立を、音声的には、[ŋg-], [ŋ-] と表わされる音によって発音する。
- 2) 故董同龢氏の理由は以下の三つである。
 - (a) 如果合併，寫起來可以有三个辦法：
 - 全用 b, l, g; 例如 bi: bĩ (mĩ)
 - 全用 m, n, ŋ; 例如 mi (bi): mĩ
 - 用 b^m, lⁿ, g^ŋ 或 m^b, n^l, ŋ^g; 例如 b^mi (bi): b^mĩ (mĩ)...
 第三式和前兩式實際上並無分別，可是寫印都不方便，最不宜採用。在第一式和第二式之間選擇，也都有不合一般音標使用習慣的地方。第一式的 'bĩ' 實際是 mĩ 還容易了解；說第二式的 'mi' 實際是 bi 就顯得過於做作了。
 - (b) m, n, ŋ 所配的韻母，除去少數成音節的鼻音，就完全是鼻化元音。如果在聲母上把 m, n, ŋ 和 b, l, g 分開；m, n, ŋ 後面韻母元音的鼻化符號就可以完全省去了。<以下省略>
 - (c) 有些閩南方言 (如潮汕一帶) 的 b, l, g 和 m, n, ŋ 的分配，條件並不和上述完全相同。為比較起來比較醒目，雙方都是分開寫比較好。p. 234
- 3) p. 7 (d) の抄訳

“早期閩南語では⁴⁾、声母として *b, l, g* を有していたが、*m, n, ŋ* はなかった。また鼻音化韻母もなかったにちがいない。後、まず第一段階として、ある種の陽声韻母が鼻音化韻母に変化し、この種の鼻音化韻母の前の声母、*b·l·g* は鼻音化韻母の影響を受けて、*m·n·ŋ* に変化した。この段階では、韻母によって、*b·l·g* の系列に属していたものと、*m·n·ŋ* の系列に属していたものとは、なお明瞭に区別できた。第二段階として異化作用 (dissimilation) が起こり、*m·n·ŋ* の後の鼻音化韻母には鼻音性を失うものが現われた。一方、この異化作用が起こらず依然として鼻音性を失わなかったものもあったが、両者の意義の弁別性は失われた。この段階では、*m·n·ŋ* の系列に属していたものと、*b·l·g* の系列に属していたものとの韻母の上での差異はなくなった。こうして閩南語は音韻として *m·n·ŋ* を有するようになると、他方言の *m·*

n·ŋ の音を有する語を借用するようになった。現在、たとえば、「馬」は [be] とも [ma] とも発音されるが⁵⁾、前者は閩南語本来の音であり、後者は *m* を音韻として有するようになって以後の音である”。

故董同龢氏は、このような通時論的観点に立って、それぞれ別個に 6 個の音素を立てている。周到的配慮を含む妥当な解釈である⁶⁾。

音節末尾子音として [n]・[ŋ] を有する音節では、有声音の頭子音 [b-], [l-] が有鼻音に交替する現象がある⁷⁾。インフォーマントはこの現象に気付き、即座に頭子音を有声音 [b-], [l-] に改めるがこの際、努力を要するようである。

ban⁷ nian⁵ pit⁴ → man⁷ nian⁵ pit⁴ (万年筆)
 ban⁷ ban⁷ a² → man⁷ man⁷ a² (慢慢仔)
 əm⁷ bian² → əm⁷ mian² (不免)
 lit⁸ pun² lan⁵ → lit⁸ pun² nan⁵ (日本農)
 ban² ta³ → man² ta³ (蚊罩)
 biən⁵ pik⁸ → miən⁵ pik⁸ (明白)

- 4) 原文では“較早的閩南話”となっている。福建語の /b/・/m/, /l/・/n/, /g/・/ŋ/ は中古漢語の明母、泥母、疑母にそれぞれ該当する。故董同龢氏の記述では、中古以前の段階を指すのか、中古と現代との中間的段階を指すのかは不明である。なお、《十五音 (明代の韻書)》では、〈門母〉で /b/ と /m/ とを、〈柳母〉で /l/ と /n/ とを、〈語母〉で /g/ と /ŋ/ とをそれぞれ表わし、有声音母と鼻音声母とは区別されていない。
- 5) [be²] (馬 <うま>), [mā¹ ɕiən⁷] (馬上 <すぐ>) <筆者注>
- 6) 筆者はこの解釈に従い、/b·m·l·n·g·ŋ/ を立てる。その他の鼻音化韻母を有する音節については、鼻音化を表わす記号 N を採用した。その理由は、N を採用すれば、tilde mark を附加する煩雑さを免れるからである。

例 [hɕā¹/huan¹/ (欵), [p'āi²/p'aiŋ²/ (歹)

福建語では、鼻音化韻母がそれ自体強い鼻音性を有するのが特徴である。筆者は、王育徳氏の英語の new の発音において母音が著しく鼻音化されているのを観察したことがある。このインフォーマントにおいても同様に鼻音化韻母には強い鼻音化がある。

- 7) 閩音系方言に属する福州語 (一般に閩北語と呼ばれている) にも、頭子音が鼻音に交替する現象があることが報告されている。

p→m t'ieŋ piŋ → t'ieŋ miŋ (天兵)
 tɕ'aŋ pouŋ → tɕ'aŋ mouŋ (青幫)
 t→n uoŋ tuŋ → uoŋ nuŋ (遠東)
 tɕ'ɣŋ touŋ → tɕ'ɣŋ nouŋ (衝動)
 l→n tɕ'iŋ liu → tɕ'iŋ niu (清流)
 ioŋ liu → ioŋ niu (楊柳)
 s→n siŋ saŋ → siŋ naŋ (先生)
 tɕ'iŋ siŋ → tɕ'iŋ niŋ (清晨) (高名凱「福州語之語彙声母同化」による)

高名凱氏は、この現象を、先行する音節の末尾子音・ŋ に同化されて後続の音節の頭子音が鼻音に交替しているのではと説明している。

c'iaŋ¹ biəŋ⁵ ciat⁴ → c'iaŋ¹ miəŋ⁵ ciat⁴ (清明節)

tian⁷ liəŋ⁵ → tian⁷ niəŋ⁵ (電鈴)

この現象は、逆行同化 (regressive assimilation) と解釈される。すなわち、音節末尾子音の [n]・[ŋ] に同化されて、主母音・介音が鼻音化され、更に頭子音が影響を受けて有声鼻音に交替するのである⁸⁾。

2.2 [l] と [dz, dʒ] について

福建語の [l] は舌尖が緊張し、かなり破裂音的で [d] に近い。このインフォーマントは、日本語の <歴史> を <溺死> のごとく発音する。しかし、一般に台湾人は日本語のダ行音をうまく発音できず、<子供> を <衣>, <電気> を <レンキ> のように発音する。これは [d] をもっていないことを示すものである。したがって、音韻論的には、破裂音/p·p'·b/, /k·k'·g/ に対応する /t/, /t'/ の有声無気の音素として /l/ を立てることができる。

音素 /l/ を立てることが適当であると考えるのは、上述のような音声的事実を有するという理由のほかに、[dz, dʒ] との関連性を考慮に入れたものである。

有声無気の破擦音 [dz, dʒ] を有するのは福建語・漳州系方言の特徴で、泉州系方言では [dz, dʒ] は [l] に合流している。ところが、福建語・台湾方言内部ではいわゆる「不漳不泉」という方言間の混淆現象があり、このインフォーマントにあっても、[l] と [dz, dʒ] とが併存しているという事実が次のように観察された。

[l-] を有する語:

li ⁷	(二)	<2 (序数詞)>
lip ⁸ lai ⁵	(入来)	<入ってくる>
lit ⁸ pun ²	(日本)	<日本>
kin ¹ a ² lit ⁸	<今仔日>	<今日>
t'o ⁵ tau ⁷ lin ⁵	(土豆仁)	<落花生の実>
liat ⁸	(熱)	<熱(ねつ)>
lau ⁷ liat ⁸	(鬧熱)	<祭礼>
c'ua ⁷ lio ⁷	(屎尿)	<寝小便する>
liok ⁴	(趁)	<追いかける>
luaq ⁸	(熱)	<暑い>
luc ⁵	(搵)	<もむ>

[dz-, dʒ-] を有する語:

hu ³ dzu ⁷	(富裕)	<裕富な>
se ³ dʒi ⁷	(細膩)	<遠慮する>
dʒi ⁷ tian ²	(字典)	<辞書>
dʒin ⁵ k'au ²	(人口)	<人口>
ai ³ dʒin ⁵	(愛人)	<恋人>
toŋ ¹ dʒian ⁵	(当然)	<当然な>
kiau ² dʒiau ²	(攪擾)	<迷惑をかける>

[l-] は口語的な基礎語彙に多く現われ、[dz-, dʒ-] は文語的な語彙に多く現われ、この [dz-, dʒ-] は [l-] より後になって習得した音であると考えられる。このように [l] と [dz, dʒ] を併有している以上、漏れなく音韻体系として記述するためには、これらに該当する二つの音素を立てなければならない。以上のような合流・併存現象を説明しやすく、且つ音声的近似性を配慮して、[dz, dʒ] に該当する音素 /r/ を立て、[l] に対しては音素 /l/ を立てるのが最適であると考えられる⁹⁾。

8) 筆者は、この現象を逆行同化と解釈する。福州語のように、先行する音節の末尾子音に影響されているのではないことは、(蚊罩), (明白) などの例で明らかである。しかしながら、福建語・台湾方言では、[ŋ] と表わされるような頭子音があるように、[b-], [l-] の調音に際しても口蓋帆の上昇が先行して、鼻音が先立って発音されていて (すなわち [mb-], [l-]) 末尾子音に -n, -ŋ を有する場合にはそれらに同化されて [m-], [l-] に交替しているとも考えられる。この点、精密な観察が必要である。

9) 王育徳氏は『台湾語常用語彙』のなかで、/r/ を立てた理由として次のような根拠をあげている。“一つにはこの声母の字是北京語で *er* と読まれる場合が多く (例えば ‘二, 兒, 而’) その北京語と関連性をもたせるため。第二には、*l* と *r* の発音は近いので、泉州人と大部分の廈門人が *r* を見て *l* に発音したとしても、あながち間違いではないように配慮したのである” 筆者は、いま、この解釈に従った。

2.3 /c·c'·r·s/ について

[ts] と [tɕ], [ts'] と [tɕ'], [dz] と [dʒ], [s] と [ç] との対立は歯茎音と歯茎硬口蓋音との対立である。[ts]・[ts']・[dz]・[s] は前舌

母音 [-i] をもたない韻母の前という環境に限って現われ, [tɕ]・[tɕ']・[dʒ]・[ç] は [-i] をもつ韻母の前という環境に限って現われ, 両者は次のような complementary distribution を示している。

	[ts]	[ts']	[dz]	[s]	[tɕ]	[tɕ']	[dʒ]	[ç]
-a	早	差		沙				
-e	坐	初		世				
-o	組	醋		数				
-ə	做	糙		嫂				
-u	煮	厝	裕	輸				
-an	贊	田		散				
-i					子	刺	字	時
-in					真	親	人	身
-ian					剪	淺	然	先
-io					照	笑	尿	燒
-ion					種	冲	絨	傷

[tɕ]・[tɕ']・[dʒ]・[ç] は後続の前舌母音 [i] を調音する際、前舌面の隆起に伴なって、[ts]・[ts']・[dz]・[s] が口蓋化され、舌面的要素が加わったものであり、同一の音素に該当するものと認め、音素としては一組の /c·c'·r·s/ を立てれば十分である。

お、後続する母音によって [χ] に傾くこともある) である。この [h] は母音間 (intervocalic position) では、たとえば, e⁷ hiau² [e³ iau²] (会曉) k'a³ ho⁷ piəŋ⁵ iu² [k'a² ɔ³ piəŋ⁷ iu²] (扣互朋友) のごとく、前後の母音の有声性に同化されて [h] が脱落する。

2.4 声門音 [ʔ], [h] について

福建語では、いわゆる“声母がなく母音で始まる”音節を音声的に観察すると、[ʔe²] (矮), [ʔi¹] (伊), [ʔa³] (愛), [ʔo¹] (烏), [ʔiəŋ²] (勇) のように、音節の最初の部分に喉頭の緊張 (glottalization) を認めることができる。これは母音が声門破裂音で始まっているのであって、無気音に属する声母と解釈し、音韻論的には音素 /·/ を立てる¹⁰⁾。

北京語の (好・花) などの頭子音 (拼音字母の h) は、奥舌面と軟口蓋最後部で調音される口蓋垂摩擦音 [χ] であるが、この北京語の [χ] に相当する福建語の頭子音は喉頭調音 (声帯間から発せられる摩擦音 [h])。な

3. 韻母

3.1 介音

介音とは頭子音と主母音との間に介在する渡り音のことである。福建語には /i/ (いわゆる齊齒呼) と /u/ (いわゆる合口呼) とがある。渡り音のない場合 (開口呼) と合わせて 3 種になる。この方言には撮口呼がない。

/i/ [i, i]

[tɕ'ia¹] /c'ia¹/ (車) [çia², /sia²/ (写) では [i] が現われ, [ʔiəŋ⁵] /ian⁵/ (鉛), [ʔiəŋ²] /ian²/ (演), [hiəŋ⁷] /hian⁷/ (現), [k'ia⁷] /k'ia⁷/ (口<立つ>), [k'iau²] /k'iau²/ (巧), [kiət⁰⁴] /kiat⁴/ (結), [k'iam³] /k'iam³/ (欠),

10) 音韻表記の際には記号として・を用いるのは不必要である。

[p'ien³] /p'ian³/ (騙), [t'ien⁷] /tian⁷/ (電), [p'iek⁰⁸] /iək⁸/ (譯・浴) などでは主母音 /a/, /ə/ に同化されて, 中舌母音 [i] が現われる。

/u/ [u, ɔ, ɔ]

[k'ui¹] /k'ui¹/ (開) では [u], [bɔe²] /bue²/ (尾), [gɔe²⁸] /gueq⁸/ (月), [mɔē²] /mue²/ (毎) では主母音 /e/ に同化されて半狭母音 [ɔ] が現われ, [gɔa²] /gua²/ (我), [hɔā¹] /huan¹/ (歛), [p'ɔa³] /p'ua³/ (破) などでは主母音 /a/ に同化されて半広母音 [ɔ] が現われる。

3.2 主母音

福建語には6種の主母音音素が立てられる。

/i/ [i] (伊・比) /u/ [u] (有・胞)
/e/ [e] (矮・父) /ə/ [ɤ] (蠟・褒)
/a/ [a] (阿・飽) /o/ [o] (烏・布)

/i/ [i, i]

[p'i¹] /i¹/ (伊) では [i], [p'im¹] /in¹/ (因), [p'it⁰] /it/ (一 <序数詞>) では幾分ゆるんだ [i] が現われる。

/e/ [e, ɛ]

[p'e⁵] /e⁵/ (鞋) では [e], [gɔe²⁸] /gueq/ (月), [kɔe³] /kue³/ (過), [hɔe¹] /hue¹/ (花) などでは介音 /u/ に同化されて, 半広母音 [ɛ] が現われる。

/a/ [ɛ, a, a]

[p'a²] /a²/ (抑), [p'ai³] /ai³/ (愛), [p'an¹] /an¹/ (安) では [a], [p'ien⁵] /ian⁵/ (鉛), [hien⁷] /hian/ (現), [p'iet⁰⁸] /iat⁸/ (□ <振る>), [tɔ'iet⁰⁴] /c'iat⁴/ (切), [liet⁰⁸] /liat⁸/ (熱) などでは, 介音 /i/ や韻尾の歯音に同化されて半広母音 [ɛ] が現われる。[gɔa²] /gua²/ (我), [paɯ¹] /pau¹/ (包), [ɕian¹] /sian¹/ (双), [paŋ⁵] /paŋ⁵/ (房), [bak⁰⁸] /bak⁸/ (目), [k'ak⁰⁴]

/k'ak⁴/ (殼) などでは, 介音 /u/ や後寄りて調音される韻尾の軟口蓋音 [k⁰] に同化されて広母音 [a] が現われる。これらの [ɛ]・[a] は音韻論的には同一の音素 /a/ に該当すると解釈される。

/u/ [u, u]

[p'u⁷] /u⁷/ (有) では [u], [p'un⁷] /un⁷/ (運) [kut⁰⁴] /kut⁴/ (骨) などでは幾分ゆるんだ [u] が現われる。

/ə/ [ɤ, e, ə]

[lv⁵] /lɔ⁵/ (勞), [pvn⁷] /pən⁷/ (飯), [mvn⁵] /mən⁵/ (門), [svn²] /sən²/ (算), [tvn²] /tən²/ (転) では [ɤ] が現われる。[tɔ'ien⁷] /c'ien⁷/ (穿), [p'ien⁵] /ien⁵/ (英), [k'ien¹] /kien¹/ (間) などでは介音 /i/ に同化されて [e] が現われ, [liɛn⁵] /liən⁵/ (能), [biɛn⁵] /biən⁵/ (明), [hiɛn⁵] /hiən⁵/ などの陽平調 (上昇調の声調) の音節ではやや広い [ɛ] が現われる。[p'iek⁰⁴] /iək⁴/ (億), [tɔ'iek⁰⁴] /ciək⁴/ (燭), [ɕiek⁰⁴] /siək⁴/ (色), [k'iek⁰⁴] /k'iek⁴/ (曲) などでは韻尾の [k⁰] に同化されて [ə] が現われる。これらの [ɤ]・[e]・[ə] などとはすべて同一の音素 /ə/ に該当すると解釈される。

/o/ [ɤ, o, ɔ]

[p'o¹] /o¹/ (烏), [po⁷] /po⁷/ (歩) などでは [o], [p'io¹] /io¹/ (腰) では [ɤ], [kɔn²] /kon²/ (講) や [tok⁰⁴] /tok⁴/ (搽) などでは韻尾に同化されて [ɔ] が現われる。

3.3 韻尾

福建語の音節末尾には, [i] /i/, [u] /u/ [m] /m/, [n] /n/, [ŋ] /ŋ/, [ʔ] /q/, [p⁰] /p/, [t⁰] /t/, [k⁰] /k/ の9種が現われる。/i/, /u/ は副母音として現われる。/p·t·k/ は内破音である。このうち /k/ はかなり後寄りて調音され, 音声的には [k⁰] で表わされる。[ʔ] /q/ は音節が連鎖する場合

「声門閉鎖音の声調交替の法則」に従って [ʔ] は消滅する¹¹⁾。一種の環境同化による交替である。

3.4 声化韻について

福建語の音節には [m⁷] (唔), [m⁵] (□ <つぼみ>), [ŋ⁵] (影), [ŋ⁵] (黄)のごとく、鼻音声母がそれだけで音節をつくっている音節主音的子音 (syllabic consonant) がある。

王育徳氏は、福建語・台湾方言では、韻母には必ず主母音が存在するという考えに立って、次のように解釈されている。

“əm [ə̃m] と əng [ə̃ŋ] は羅常培氏のいわゆる <声化韻> で¹²⁾、その意味は声母 m, ŋ が 韻母と化したということであろう。確かに [m] や [ŋ] は母音と同じく噪音の部分の音が聞えず、呼吸は自由に鼻を通るので、それだけで音節がつくれる性質の音である。しかし、羅氏自身も認めるように、他の声母を前にもつとき、かすかながら、渡り音 [ə] が聞える。しかし、この [ə] が渡り音でなく、却って主母音で、それが -m, -ng のために少しかげが薄くなっただけであると私は解釈する”¹³⁾

王育徳氏は、したがって、声化韻の [m], [ŋ] を音韻論的には、/əm/, /əng/ と解釈されている。筆者はこの音韻論的解釈に同調するものである。更に、この syllabic consonant について追加的説明を加えれば、頭子音や介音を伴わず、主母音がそれらによって保護されていない音節構造では、比較的長い持続部をもち強い「きこえ」を有する [m], [ŋ] に主母音が同化されて [ə] が弱化しているのであると筆者は考える。

3.5 音節末尾子音の連音現象

福建語の音節末尾子音のうち [p⁰], [t⁰], [k⁰] は、母音間 (intervocalic position) では前後の母音の有声性に同化されて、有声の摩擦音となり、更にその有声化した音節末尾子音は後続の音節と連結し、あたかも後の音節の頭子音となっている様相を呈する。この連音現象は、とくに、接尾辞 ‘仔’ が附加されている語において顕著にみられる¹⁴⁾。無声の両唇音 [p⁰] は有声の両唇摩擦音 [β] となる。

[liã³ βa²] /liap⁸ a²/ (粒 仔) <おでき・腫物>
 [a³ βa²] /ap⁸ a²/ (盒 仔) <小箱>
 [ka¹ βa²] /kap⁴ a²/ (蛤 仔) <貝>
 [gɿã¹ βa²] /giap⁴ a²/ (挾 仔) <ヘア・ピン>

無声の歯音 [t⁰] は有声の側面音 [l] となる。

[tɕi³ le⁵] /cit⁸ e⁵/ (一 兮) <一つ>
 [tɕi¹ le⁵] /cit⁴ e⁵/ (此 兮) <これ>
 [ts³ a³ la²] /c³at⁸ a²/ (賊 仔) <泥棒>
 [p³ie¹ la²] /p³iat⁴ a²/ (砸 仔) <皿>
 無声の軟口蓋音 [k⁰] は軟口蓋摩擦音 [ɣ] となる

[tɕ³ie¹ ɣa²] /c³iæk⁴ a²/ (粟 仔) <もみ>
 [gje³ ɣa²] /giøk⁸ a²/ (玉 仔) <宝石の一種>
 [hau³ k³a¹ ɣa²] /hau⁷ k³ak⁴ a²/ (粟穀仔) <柄杓>
 [kɿo¹ ɣa¹ hɕe¹] /kiøk⁴ a² hue¹/ (菊仔花) <菊>
 [tɕie¹ ɣa²] /tiøk⁴ a²/ (竹 仔) <竹>
 [ta³ ɣe⁵] /tak⁸ e⁵/ (逐 兮) <毎~>
 音節末尾子音 [m], [ŋ], [ŋ] は、後続する音

11) 陰入は陰上に、陽入は陰去にそれぞれ交替することを指す。

12) 『厦門音系』p. 18 <筆者注>

13) 『台湾語常用語彙』pp. 25-26

14) ‘仔’ や ‘兮’ は非自立形式である。両者とも母音で始まる音節であり、音韻論的にはそれぞれ /-a²/, /-e⁵/ と解釈されるが、連音現象が起こる以上 /-/ はこの場合消滅していると解釈される。これら ‘仔’ や ‘兮’ の非自立形式が附加された語の音韻論的解釈には、とくに hyphen を用いて /liap⁸-a²/ (粒仔), /cit⁸-e⁵/ (一兮)のごとく表わすのも一方法と考えられる。

節と連結し、後の音節の頭子音となる。多くは接尾辞‘仔’が附加されている語である。

[ka⁷ mǎ²] /kam¹ a²/ (柑 仔) <密柑>

[gin¹ nǎ²] /gin² a²/ (团 仔) <子供>

[kɿ¹ nǎ² lit⁴] /kin¹ a² lit⁸/

(今仔日) <今日>

[mɿ⁷ nǎ¹ tsaj³] /min⁵ a² cai³/

(明仔再) <明日>

[hɔq⁷ nǎ¹ hɔe²] /huan¹ a² hue²

(番仔火) <マッチ>

[su⁷ nǎ²] /sun¹ a²/ (□ 仔) <甥>

[tɿeⁿ³ nǎ²] /tian⁷ ian²/

(電 影) <映画>

[a^{u7} ŋǎ²] /aŋ¹ a²/ (厖 仔) <人形>

[ts^{a7} ŋǎ²] /c^{aŋ}¹ a²/ (葱 仔) <葱>

[t^{y7} ŋǎ²] /t^{əŋ}⁵ a²/ (糖 仔) <あめ>

[t^{a7} ŋǎ¹ mɿŋ⁵] /t^{aŋ}¹ a² mǎŋ⁵/

(窓仔門) <窓>

次の例では、主母音や音節末尾の副母音が後続する音節と連結している。

[i¹ ɿa²] /i² a²/ (椅 仔) <椅子>

[hi⁷ ɿa²] /hi⁵ a²/ (魚 仔) <魚>

[a⁷ ɿa²] /au¹ a²/ (碗 仔) <茶碗>

[tɕɿa¹ ɿa²] /ciau² a²/ (鳥 仔) <小鳥>

以上は語の場合であるが、同様の連音現象は音節が連鎖した文においても観察される。

[mǎɿ kɔ¹ ŋǎ¹ nǎ¹] mai³ koŋ² an² ne¹.

(□講按咩) <そういうふうに言うな>

無声の閉鎖音が前後の母音に同化されて摩擦音となる語の例は先にあげたが、同様の現象は、音節が連鎖した句においても顕著に観察される。

[li³ βai³] lip⁸ lai⁵ (入来) <入ってくる>

[k^{a7} tɕa³ li^{a3} βe⁷] kaq⁴ tua⁷ liap⁸ e⁵ (較大粒兮) <大きな粒のもの>

[k^{ɿ1} tɕɿa⁰ li⁰] k^{ɿ3} ciap⁴ li² (去接汝) <君を迎えにゆく>

[kɿ⁷ na¹ li³ le⁰ ts^{a3}] kin¹ a² lit⁸ e⁵ c^{a1} (今仔日兮菜) <今日の料理>

[ɕi^{e4} ɿa⁰] siək⁸ a⁰ (熟啦) <熟した>

[tɕio² ɿɕa⁰] cioq⁴ gua² (借我) <私に貸

す>

[ho³ ɿɕa¹ tɕ^ɿǎ²] ho⁷ gua² c^ɿian² (互我請) <私がおごる>

会話における速い発音ではこれらの母音間の摩擦音 [ɿ] や [l] は脱落する。

[tɕio² ɿa¹ k^ɿǎ³] cioq⁴ gua² k^ɿuan³ (借我看) <私に貸してみせる>

[ho³ ɿa¹ tɕ^ɿǎ²] ho⁷ gua² c^ɿian² (互我請) <私がおごります>

[ɿǎ³ k^ɿɿ³ ai⁰] uan⁷ k^ɿɿ³ lai⁵ (換起来) <着がえる>

[lak⁰⁴ lə³ ai⁰] lak⁴ ləq⁸ lai⁵ (落落来) <落ちてくる>

[k^ɿǎ³ k^ɿɿ³ ai⁰] k^ɿuan⁷ k^ɿɿ³ lai⁵ (看起来) <見ると～>

子音のみならず、母音も前の音節の主母音に同化されることがある。以下の例では、前の音節の前舌母音 [i] が後続する音節 hoŋ⁵ (互-人)、ho⁷ (互)の主母音に影響を与え、奥舌半広母音 [ɔ] が前舌半広母音 [œ] に発音されている。また [h] が、しばしば脱落することも観察される。

[kɿ¹ hœŋ⁷ t^{a7} t^{e3} k^ɿɿ³] k^ɿɿ³ hoŋ⁵ t^{a7} t^{e3} k^ɿɿ³ (去互-人偷□去) <盗まれる>

[k^{a1} k^ɿɿ¹ œŋ⁷ ta³ tjo²⁰] k^{a1} k^ɿɿ³ hoŋ⁵ taq⁸ tioq⁸ (跤去互-人踏著) <足を踏まれる>

[k^ɿɿ¹ hœ³ hɔe¹ ɕio⁷ ɕi²] k^ɿɿ³ ho⁷ hue² sio¹ si² (去付火烧死) <焼け死ぬ>

4. おわりに

以上、主として音韻論的解釈の上から、福建語におけるいくつかの音声的特徴を考察した。声調については稿を改めて分析する予定である。なお、本稿作成にあたって以下の論文・著書を参考とした。

『厦門音系』羅常培, 1930, 北京。

「福州語之語叢声母同化」(燕京学報 第 33 期) 1947。

『台湾語常用語彙』王育徳, 1957, 東京。

「厦門方言的音韻」(史語所集刊 第29本上冊) 1957, 台北。

『漢語方言概要』袁家驊, 1960, 北京。

「福建漢語方言分区略説」(中国語文 127) 潘茂鼎等, 1963, 北京。

『記臺灣的一種閩南記』(史語所単刊 甲種

之 24) 1967, 台北。

最後に、本稿執筆の過程において、お茶の水女子大学の頼惟勤教授・明治大学の王育徳助教授から貴重な御教示を賜った。記して謝意を表す。